

## 第5章 総括

### 第1節 縄文時代の上野平遺跡について

今回の調査では縄文時代の遺構は検出しなかった。縄文土器は、遺構外から総数で3点 (48.6g) 出土した。うち2点は胎土中に纖維が混入していることから、縄文時代前期と推定されるが、器面の摩耗が激しく土器型式等の比定はできない。残りの1点は口唇部にR Lが施文されるものであるが、小片のため時期不明である。縄文時代の石器は、遺構外から総数で31点 (1,698.5g) 出土した。散漫的な出土で、特定箇所に集中するような出土はなかった。剥片石器が30点 (1,690.5g)、礫石器1点 (8.0g) である。石材は、珪質頁岩が重量比で98.50%を占め (29点・1,673.0g)、緑色凝灰岩1.50% (2点・25.5g) となっている。剥片石器の器種・石材組成について、表2にまとめた。

表2 石器組成表

表2-1 (全体)

石材 器種		点数 重量 合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鏸	点数 重量	1 2.4	3.23% 0.14%	1 2.4	3.23% 0.14%		
石匙	点数 重量	1 13.5	3.23% 0.79%	1 13.5	3.23% 0.79%		
石核	点数 重量	3 1115.6	9.68% 65.68%	3 1115.6	9.68% 65.68%		
スクレイパー	点数 重量	2 78.9	6.45% 4.65%	1 61.4	3.23% 3.61%	1 17.5	3.23% 1.03%
二次加工のある剥片	点数 重量	1 8.9	3.23% 0.52%	1 8.9	3.23% 0.52%		
微細剥離のある剥片	点数 重量	5 151.6	16.13% 8.93%	5 151.6	16.13% 8.93%		
剥片	点数 重量	17 319.6	54.84% 18.82%	17 319.6	54.84% 18.82%		
磨製石斧	点数 重量	1 8.0	3.23% 0.47%			1 8.0	3.23% 0.47%
総計	点数 重量	31 1698.5	100.00% 100.00%	29 1673.0	93.55% 98.50%	2 25.5	6.45% 1.50%

表2-2 (剥片石器組成表)

石材 器種		点数合計 重量合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鎌	点数 重量	1 2.4	3.33% 0.14%	1 2.4	3.33% 0.14%		
石匙	点数 重量	1 13.5	3.33% 0.80%	1 13.5	3.33% 0.80%		
石核	点数 重量	3 1115.6	10.00% 65.99%	3 1115.6	10.00% 65.99%		
スクレイパー	点数 重量	2 78.9	6.67% 4.67%	1 61.4	3.33% 3.63%	1 17.5	3.33% 1.04%
二次加工のある剥片	点数 重量	1 8.9	3.33% 0.53%	1 8.9	3.33% 0.53%		
微細剥離のある剥片	点数 重量	5 151.6	16.67% 8.97%	5 151.6	16.67% 8.97%		
剥片	点数 重量	17 319.6	56.67% 18.91%	17 319.6	56.67% 18.91%		
合計	点数 重量	30 1690.5	100.00% 100.00%	29 1673.0	96.67% 98.96%	1 17.5	3.33% 1.04%

表2-3 (礫石器組成表)

石材 器種		点数合計 重量合計	構成比	緑色凝灰岩	構成比
磨製石斧	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%
合計	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%

石器は出土点数が少ないので、石核と剥片の出土比率が高いこと、定形石器と同じ石材の石核が出土することから、遺跡内で石器製作が行われていたことが推測される。定形石器や二次加工のある剥片は小型のものが多いことから、小型の剥片石器を製作していた可能性が高い。石材はほぼ珪質頁岩に限られる。珪質頁岩はこの地域に分布する小沢層に由来するものと考えられ、遺跡直下の海岸には多量に散布していることから、容易に獲得できたと推定される。

過去調査でも縄文時代の遺構は検出されず、遺物の出土も僅かであった（橘・奈良1977）。しかしながら、遺跡周辺で縄文時代の遺物が採取されている（寺田1976）。また、今回の調査期間中にも遺跡周辺の住民から調査区の北側にある畠から縄文時代の遺物が出土したことを聞き、出土した石匙や磨製石斧を実見した。このことから、当遺跡の縄文時代の主体となる活動域は、今回の調査区の北側に広がっているものと考えられる。

## 第2節 平安時代の上野平遺跡について

### 1 遺構について

#### (1) 竪穴建物跡

調査区北東から1棟検出した。建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるため、建物跡全体の輪郭は不明である。本建物跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI01（新）、古期の建物跡をSI01（旧）とした。検出した範囲では、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築されている。カマドは検出した建物範囲内では確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。上北北部・陸奥湾沿岸では10世紀以降に東カマドが主流になるとされる（宇部ほか2014）ことを勘案すると、北西壁よりも北東壁に作られていた可能性が高いが、下北地域での様相は後述のとおり調査事例が少ないため、今後の事例增加後に再度検討を要する。SI01（旧）の床面が平坦で、掘削工具痕と推定される凹凸が見られなかったため、調査時点ではSI01（新）の掘方SI01（旧）の直上までと判断していたが、図面等の検討からSI01（新）の掘方はSI01（旧）の床面を掘り込んでいる可能性がある。主柱穴と考えられる柱穴はSI01（新）では1基、SI01（旧）では2基検出した。SI01（旧）の柱穴は壁際に寄ったいわゆる「壁柱タイプ」で、6本柱の建物跡であった可能性がある。柱穴規模はSI01（新）に比べSI01（旧）の方が大きく、また、堆積状況から、SI01（新）のPit01とSI01（旧）のPit01は柱の抜き取り、SI01（旧）のPit02は柱の切取り行為があったと推測される。SI01（新）の床面から焼土・炭化物が多量に出土しており、焼失建物跡と判断される。遺物はSI01（新）から土師器の壺・甕、石器（砥石）、鉄生産関連遺物（鉄製品・鉄滓・羽口溶解物）が、SI01（旧）から土師器の甕が出土した。SI01（新）では主に床面から出土した。壺の9-2は内外面に炭化物が付着している。甕は外面がケズリ・内面はナデが卓越するものがほとんどで、器表面に顕著な被熱痕跡が認められるものもある。甕の9-3は底部に向かって急激にすぼまる器形である。その他、被熱礫や焼成粘土が出土した。これらがカマドの芯材や構築材であった場合、建物跡の廃棄の際にカマドが壊された可能性がある。堆積土中に白頭山一苦小牧火山灰が確認できなかったことから、10世紀中葉以降の構築年代が推定され、後述する遺物の年代から11世紀前葉に廃絶した建物跡と考えられる。

下北地域における平安時代の竪穴建物跡は、むつ市川内町田野沢（1）遺跡・むつ市最花遺跡（旧最花南遺跡）・むつ市第一田名部小学校校庭遺跡・むつ市内田（1）遺跡・東通村銅屋（3）遺跡・東通村アイヌ野遺跡・東通村将木館遺跡・東通村向野（2）遺跡・東通村稻崎遺跡で調査事例があり、本遺跡で10遺跡目になると思われる。時期が分かる建物跡の多くは10世紀前半とされ、本遺跡と同時期のものは将木館遺跡が該当しそうであるが、数が少なく各建物跡の比較ができる状況にない。現時点では下北地域の最西で確認された平安時代の建物跡と指摘するに留め、資料の増加を待ちたい。

#### (2) 土坑

3基検出した。調査区の縁辺に位置し、平面形は橢円形である。第1号は第1層中に白頭山一苦小牧火山灰が窪地に自然堆積しており、火山灰降下年代である10世紀中葉以前に構築・廃絶・埋没していたと推定される。SI01（新）期には白頭山一苦小牧火山灰が確認できなかったことから、少なくとも第1号土坑はSI01（新）より古い位置付けが可能である。後述する出土遺物とも整合しており、調

査区周辺域に集落がある可能性が考慮される。第1号土坑以外は遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。用途や性格は不明である。

### (3) 焼土遺構

4基検出した。調査区中央と南北端に位置し、平面形は不整形である。被熱範囲は黒褐色に橙色粒が混入する程度で、しまりはあるが、被熱は顕著ではない。時期を示す遺物は出土しなかつたが、検出層位から平安時代以降と考える。被熱の厚さが使用時間に比例するものと仮定すると、その期間は短かったものと推定される。北海道では、屋外炉の灰の片付けや生活残滓の廃棄行為の痕跡とされる「焼土粒集中」が擦文時代に伴って検出されており、そのような遺構である可能性もある。

## 2 遺物について

平安時代の出土遺物を図15・16にまとめた。

### (1) 土師器 (図15-1~20)

堅穴建物跡 (SI01 (新)) からの出土が大半を占める。遺構外からは散漫的な出土状況を示し、特定箇所に集中するような出土はなかった。

遺構内外から土師器の壺・甕が3,058.3g出土した。壺は2点出土した。いずれも堅穴建物跡 (SI01 (新)) から出土したものである。ロクロ形成で、内面黒色処理がされているもの (1) とされないものの (2) がある。2の口径は11.2cmと推定される。底部は欠損しているものの、断面の屈曲具合から底部に近いものと推定される。器高は低く、器壁も薄い。小振りのものである。1は床面から正立状態で出土したもので、内外面に炭化物が付着している。炭化物は、内面には斑状・外面には帶状に付着する。付着炭化物について、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体を行ったところ (第4章第2節参照、土器内面: PLD-45895・試料No.1 / 土器外: PLD-45896・試料No.2)、5世紀前葉～6世紀末葉の年代と、C<sub>3</sub>植物に近いもしく草食動物とC<sub>3</sub>植物との分析結果が得られた。SI01 (新) は焼失建物跡であり、焼失した建物跡の建築部材が土器表面に付着した可能性がある。出土した壺は2点ではあるものの、大型のものと小振りなものと2極化しており、10世紀後半以降の年代が考えられる。3～20は甕である。全体に被熱しており、6・7・19は特に顕著である。器面調整は、外面はケズリ・内面はナデが卓越する。3は底面以外ほぼ復元できた。底部に向かって急激にすぼまる器形である。平川市 (旧碇ヶ関村) 古館遺跡や北海道松前町札前遺跡から類似した器形の甕が出土している。口縁部の内外面に煤の付着が、内面に被熱痕跡が認められる。4～8は口縁部で、頸部は短く、強く外反する。9～16は胴部で、14はロクロ形成のものである。17～20は底部で、底面はナデ調整のもの (17・18) とケズリ調整のもの (19・20) がある。底部は張り出さない。6・7・10は製塩土器の可能性がある。以上のように、土師器甕の頸部や器面調整の特徴および遺構の構築年代から10世紀中葉～後葉以降と考えられ、古館遺跡や札前遺跡の年代から11世紀前葉まで下ることも考えられる。

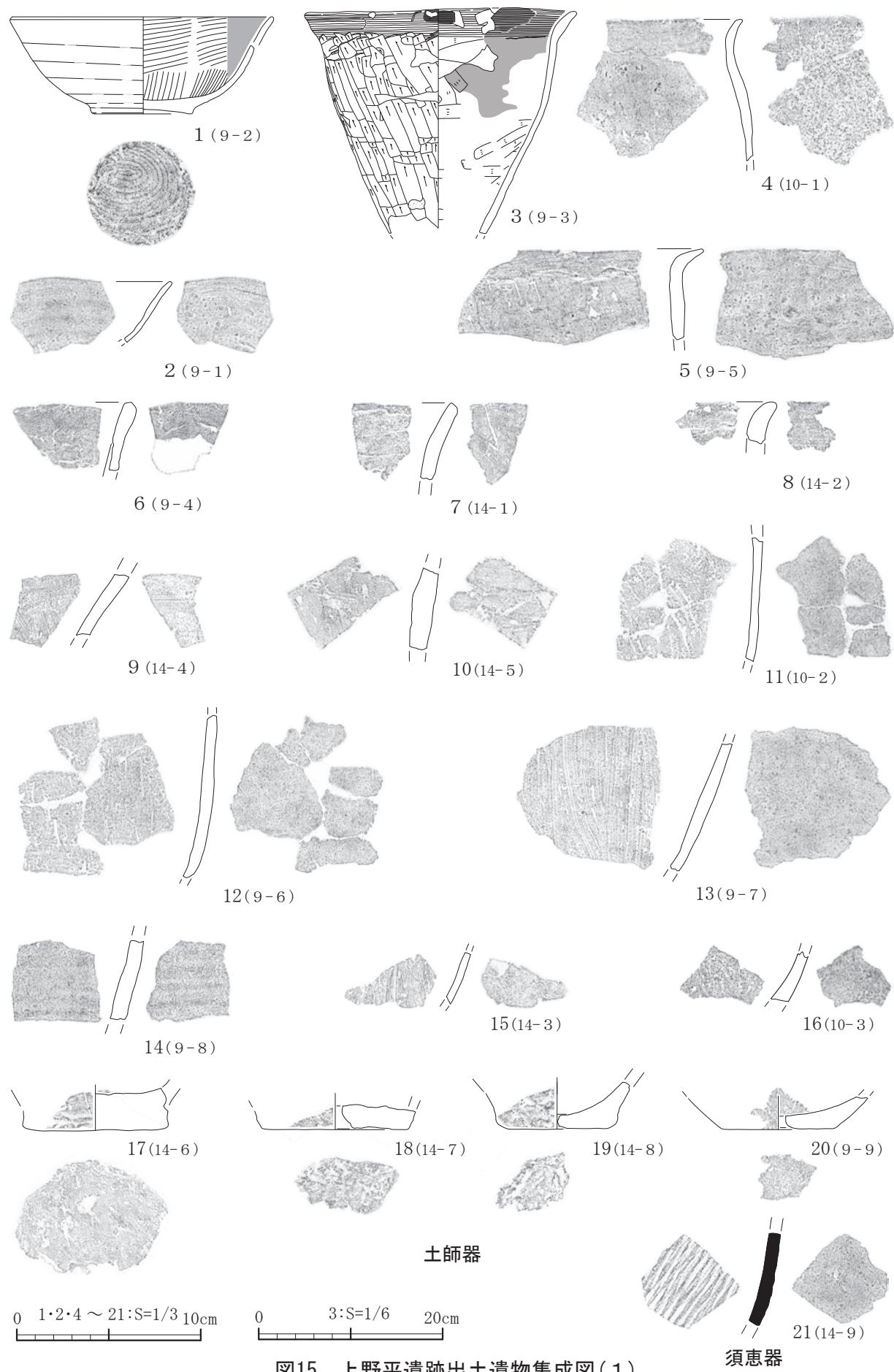


図15 上野平遺跡出土遺物集成図(1)

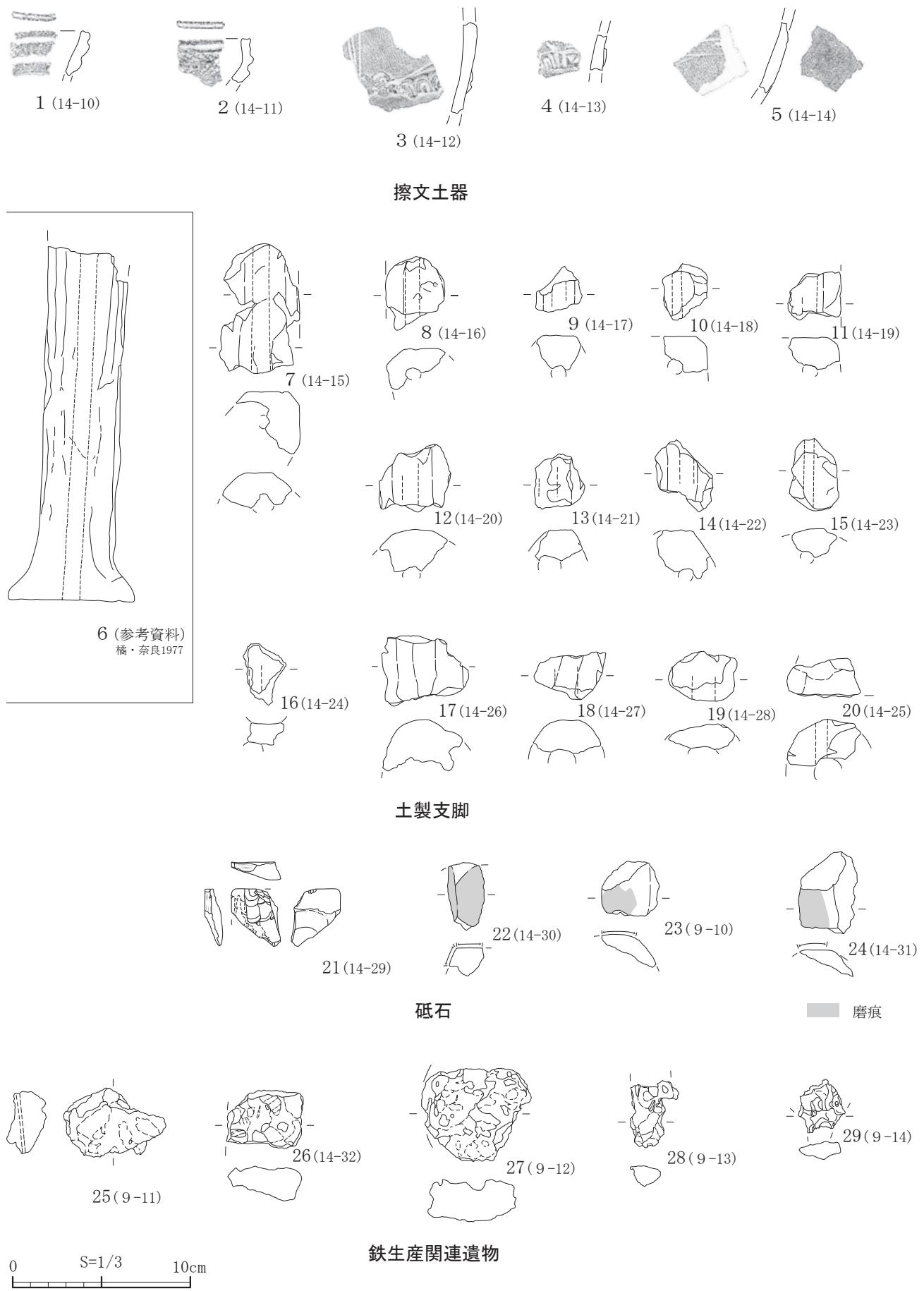


図16 上野平遺跡出土遺物集成図(2)

#### (2) 須恵器 (図15-21)

須恵器は遺構外から1点 (20.4 g) 出土した。甕の胴部片で、外面はタタキ、内面にはナデが見られる。諸特徴から五所川原窯跡産と推測され、10世紀中葉以降の時期が推定される。

#### (3) 擦文土器 (図16-1~5)

擦文土器は遺構外から5点 (47.0 g) 出土した。全て甕で、外面にハケメ、内面にミガキが施されたものである。1・2は口縁部、3~5は胴部である。口縁部は外面と口唇部に沈線が施されたもので、2の外面には小口状の工具によると思われる刺突が矢羽状に施されている。3・4は貼付囲繞帯が施された胴部片で、貼付囲繞帯の上面には馬蹄形文が施されたものである。5は沈線が施された胴部であるが、文様モチーフは不明である。前回調査で1と同様のものは第3類擦文土器に分類されている（橘・奈良1977）。これは齋藤のI群土器（齋藤2002）・塙本のS2期もしくはS4期（塙本2002）・鈴木のII-A類もしくはII-B類（鈴木2006）に相当すると考えられる。9世紀後葉から10世紀中葉の時期が想定されている。2と同様のものは第2類擦文土器に分類され、同じく齋藤のII群土器・塙本のS8期~S9期・鈴木のII-D類に相当する。10世紀前葉から後葉の時期が仮定されている。3・4と同様のものは第1類擦文土器に分類され、齋藤のIII群土器・塙本のS9期に相当する。10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられているが、貼付囲繞帯が施されていることから11世紀（鈴木2006）の年代と考えたい。5は横走沈線がないことから齋藤のIII群もしくはIV群土器と推定される。

（平山）

#### (4) 土製支脚 (図16-7~20)

土製支脚は遺構外から547.4 g 出土した。全て内孔を有する棒状のもので、多角柱状のものと円柱状のものとがある。図示した14点 (264.1 g) のうち1点を除く13点は体部片である。色調は、破損面も含め淡橙~灰白色を呈している。7~19は体部片である。7~16の外形は多角柱状で、四角柱の四隅を面取りした八角柱を呈するものと思われる。内孔形は全て円形で、芯材は7を除き、焼成前に抜かれていたものと思われる。17~19の外形は円柱状で、残存部外形はかなり摩耗している。内孔形は円形で、孔径が他個体に比べ、やや大きくなる傾向が認められる。芯材は17以外、焼成前に抜かれていたものと思われる。20は支・脚部片である。平面形は多角形で、体部外形も多角柱状を呈していたものと思われる。内孔形は円形で、芯材は焼成前に抜かれていたものと思われる。孔径が他個体に比べ、やや大きい。多角柱状のものでは規格性が窺われる（特に7・8・9および10・11）。今回の調査では多角柱状のものと円柱状のものとが出土したことになるが、出土状況から時期差や同時性は判明しなかった。なお、前回の調査では多角柱状のものが出土している（橘・奈良1977）。参考資料として、残存率が高いものを提示した（6）。10角柱と報告されているものである。平内町大沢遺跡でも多角柱状のものと円柱状のものとが出土しており、10世紀後半から11世紀後葉の年代が考えられている（青森県教育委員会2005）。

今回の調査では製塩遺構は確認できなかった。製塩土器も出土しなかったが、前述のように土師器の甕としたものの一部に製塩土器が混在している可能性がある。昭和51年の調査では製塩遺構が検出されており、これは標高約9 mと遺跡の中でも高所に設置されている。陸奥湾からの距離は然程では

ないものの、海面から比高のあるところに直接多量の海水を運び込むのは困難であることから、遺跡近辺の長浜海岸辺りで採鹹工程が行われ、遺跡内で煎熬を行っていたものと推測される。なお、遺跡の所在する宿野部は近世に塩釜が築かれたことが文献記録に残っている（川内町2005）。 （笹森）

#### （5）石器（図16-21～24）

石器は砥石が4点（48.7g）出土した。第1号竪穴建物跡（新）の堆積土から1点（23:16.9g）、遺構外から3点（21・22・24:31.8g）の出土である。礫面の1～2面を使用面としたものである。全て破損した小片であるが、使用によるものであるかは判然としない。石材は、21が珪質頁岩で、他は凝灰岩である。21は薄い板状の石の端部を使用面としたものである。なお、前回の調査でもディサイイト（石英安山岩）製の砥石が2点出土している（橘・奈良1977）。

#### （6）鉄生産関連遺物（図16-25～29）

鉄生産関連遺物は5点（179.8g）出土した。第1号竪穴建物跡（新）の堆積土から4点（25・27～29:134.7g）、遺構外から1点（26:45.1g）の出土である。25は板状の鉄製品・26～28は鉄滓、29は羽口溶解物と思われる。26の表面は灰白色を呈し、上面は比較的平坦で、下面是半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。炉内滓と推定される。27の表面は赤褐色を呈し、上面は比較的平坦で、下面是半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。碗形滓である。28の表面は赤褐色と灰白色が混在し、上面は比較的平坦で、断面は半円状を呈する。炉内流動滓と思われる。製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土しており、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測する。調査区付近では羽口が採取されている（橘・奈良1977）。

### 3 平安時代の様相について（図17）

上野平遺跡は、昭和51年の調査で平安時代の製塩遺構が検出され、土師器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土している。今回の調査では竪穴建物跡・土坑を検出し、昭和51年の調査区の一部を確認した。遺物は土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土した。

上記のとおり、今回の調査区における土地利用変遷は、10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉の2期になると推定され、後者が主体と考えられる。竪穴建物跡は調査区北東端で検出したことから、居住域は遺跡東端の宿野部川に面した丘陵崖付近に展開していた可能性が高い。製塩遺構は、確認された昭和51年調査の調査区配置から、今回調査区の北西側に位置していたことが判明した。居住域と空間を分けていた可能性がある。また、製塩遺構は周辺より高まった場所に位置していることから、採鹹過程は海岸付近で行われていたと推測される。煎熬工程のみでなく、製塩土器・土製支脚の製作等の労力を考えると、自家消費よりも交易を目的としていたと推定される。鉄生産関連遺構は検出できなかったが、製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土していること、調査区付近で羽口が採取されていることから、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測される。おそらく調査区外の北側であろう。出土遺物は9世紀後葉から10世紀中葉と10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられ、主体は後者であった。土師器・石器・鉄生産関連遺物は竪穴建物跡内から出土したものが多い。土製支脚は調査区北西から出土したものが多く、製塩遺構との関連が窺われる。擦文土器も同様

の出土を示し、昭和51年の調査でも製塩遺構付近から出土している。

当遺跡は陸奥湾沿岸に位置する平安時代の集落遺跡で、降下火山灰や出土遺物から、その存続期間は10世紀中葉以前から11世紀にかけてであると推測される。また、生産活動（製塩・鉄生産）を行っていた集落で、活動域の中心は今回の調査区北側の段丘中央寄りであったと考えられる。製塩や鉄生産は多量の燃料を必要とすることから、集落の機能時には周辺の木々はほとんどが伐採されると推定され、現状では山林となっている遺跡近辺の景色も当時はかなり違っていた可能性が高い。平安時代でも10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉と考えられる遺構・遺物があるため、大きく2時期が想定される。前者は第1号土坑と擦文土器の一部、後者は第1号竪穴建物跡と土師器・擦文土器の一部・土製支脚である。下北半島は各時代を通して北海道との関係を保つ地域であり、本遺跡も擦文土器の出土から北海道と関連を持っていたと考えられる。本遺跡の主体となる10世紀中葉から11世紀前葉は、北東北で区画（防御性）集落が盛行する。今回の調査で確認されていないが、調査区外に濠が存在する可能性もある。

なお、調査区より北の地点から奈良時代の土師器が採取されていることから（橘・奈良1977）、今回の調査区の北側に奈良時代の遺構が存在すると推定される。また、今回の調査では遺構・遺物は検出しなかったが、調査区より南東の地点で人骨が発見されており（森本・橘1974）、中世には遺跡南端が埋葬域として利用されている。

（平山）

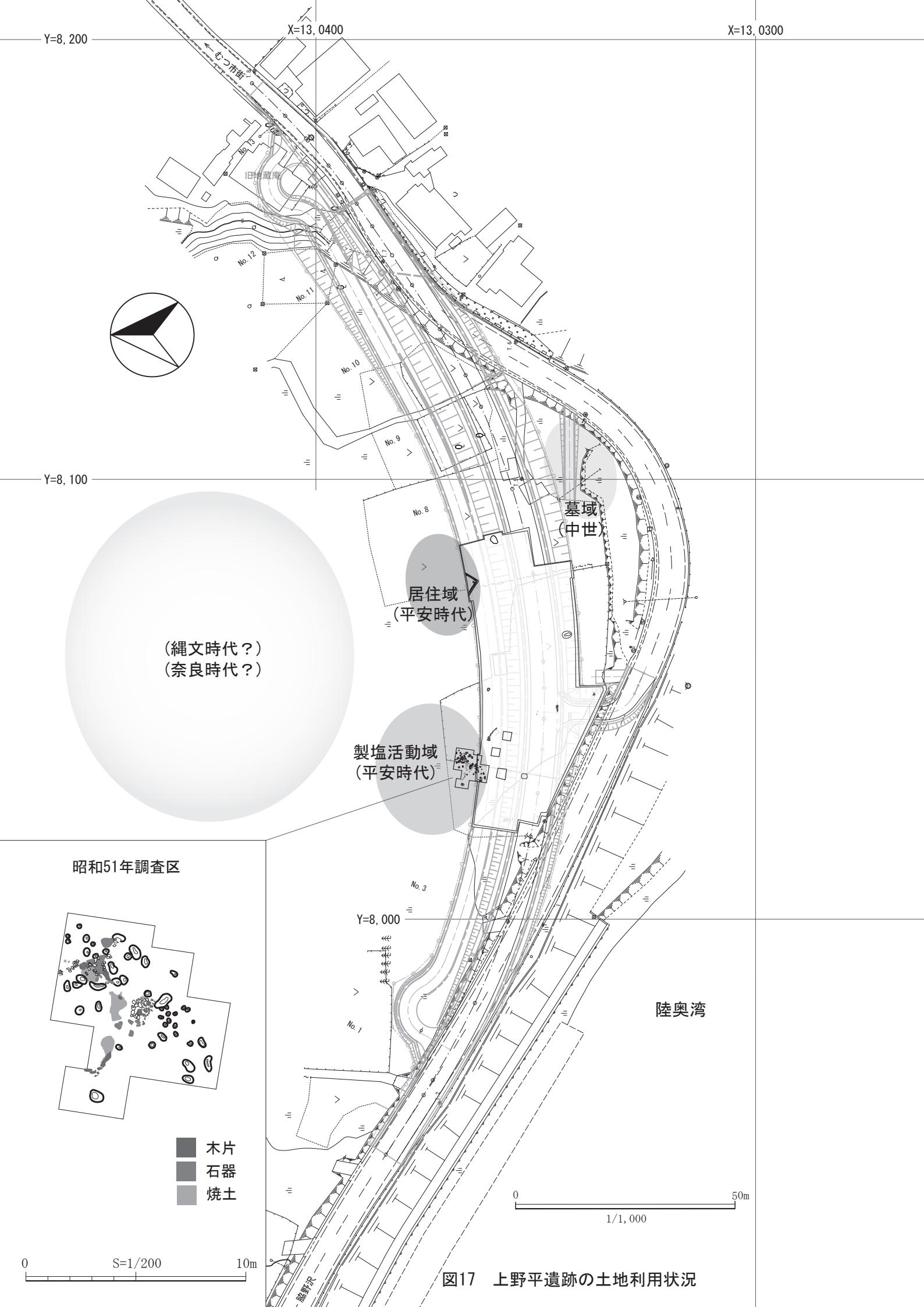


図17 上野平遺跡の土地利用状況